

新連載

泥縄式卒論についての 一考察

[解題]

「泥縄式卒論についての一考察」は、筆者（津曲）が北大文学部言語学研究室で助手をしていた当時、『研究室日誌』という雑記帳に4回に渡って連載したものである。助手の重要な仕事に卒論指導があったが、内容以前にテーマの選び方、文章の書き方といった問題でつまづく学生が多かったことは、おそらく今も変わっていない。迷える学生のために、筆者なりの経験と信念をふまえて、卒論のための最小限のエッセンスを示したものである。主任教授の池上二良先生が定年を迎える年度だったから、1983年に書いたものである。当時研究室の4年生にカワイイ、しかしノンビリ屋の女子学生が多かったことが、執筆の直接の動機だったかもしれない。ちなみに池上先生は、卒論の口述試験のときになって初めて、学生に対し「ほう、君はこんなことやってたですか」とおっしゃるようなタイプの先生だった。もちろんこの文章の存在などご存じない（はずである）。『研究室日誌』はもっぱら学生（とまだ学生気分だった助手）が好き勝手なことを書きあう場だった。

卒論と言えば原稿用紙に手で書くのが当たり前の時代だったから、今の時代にはそぐわない記述もあるが、論文作法の基本は昔も今も変わらないと思う。筆者が北大を離れてからも、この「泥縄式」は毎年卒論の森に迷う多くの学生がすぐるところとなったと聞く。10年ぶりに北大に戻って、相変わらずコピーが流布していると知ったときは、感慨深いものがあった。執筆後20年を経た今でも、おそらくだれが書いたかも知られぬまま、コピーにコピーを重ね、北大の外へさえ持ち出され、ときに怠惰をそそる魅惑的な標題ゆえに「禁断の書」とされながらも、ひそかに読み継がれている（らしい）。冗談交じりで書いた雑文が、筆者のどの論文よりも熱心に参照されているかと思うと、いささか複雑な気がしないでもないが、ありがたいことでもあり、また文章が一人歩きすることへの戸惑いも感じる。

原本が今どうなっているかはわからない。言語学研究室が言語情報学研究室へと再編されたときに、ゴミとして処分されたかもしれない。コピーも長いこと筆者の手元にはなかったが、当時から何代も後の卒業生の手から得ることができた。昔の自分に出会ったような気恥ずかしさをおぼえたが、下書きもなしに、なぐり書きでわれながらよく書いたな、と思う。今ならワープロで、書いては消し、進んでは戻る書き方に慣れてしまって、いきなり頭から書き下していくことはできないのではないかと。きっとワープロ時代の卒論にはまた、それなりの作法や技術があるに違いないが、それをここで書き足す必要はないだろう。その手の指南書はすでに選択に迷うほどあふれているからである。むしろ情報がありすぎるのが、今の学生にはかえって不幸な面もあるのかもしれない。

その意味では、本稿よりはるかにすぐれた卒論の手引きはいくらでもあるが、それらは往々にしてまじめで用意周到な学生のために、詳しすぎるほどにこと細かく卒論のあるべき姿を描いている。本稿が念頭に置いているのは、勤勉なアリではなく、夏を遊びほうけたキリギリスである。そんなものをじっくり読んでいるヒマはないのだ。ちなみにこの文章が書かれたのは11月である。卒論締切は例年クリスマス前後だったから、いかに（学生本人はおろか指導にあたる助手にとっても）せっぱつまったドロナワ的状况だったかがわかっていうものである。とにかく卒論のカチチだけでも何とかしてほしいという願いを込めて、十分条件ではなく最低限の必要条件を示したものがこれである。これに甘んじてはいけな

いが、これにのっとれば何とか卒論っぽいカタチにはなるはずである。もちろん「まじめな」学生にも何かしらヒントになるものを含んでいることを期待している。思い切った枝葉の切り捨てと、身近な学生に寄せた本音の語り口が、いまだに頼りにされる原因かもしれない。当時の研究室を知る者にしかわからないギャグなどもちりばめてあるが、あえて原文のままここに再録・公開する次第である。

[第 1 回]

§ 0. 序

木枯らし吹き荒れる 11 月となり、湯豆腐のおいしい季節となりましたが、四年生各位には湯豆腐もノドを通らない毎日かとイイバチご同情申しあげます。締切りまであと 5 0 日となりましたが、追い込みというより追っかけられているほうが多いのではないのでしょうか。去年でしたか「卒論には湯豆腐がよくにあう」と喝破した文士がおりましたが、けだし名言だと思います。もっとも本人は「早く卒論を書き上げて湯豆腐などつつきたい」という単純な願望をのべただけかもしれませんが、私は卒論はまさに湯豆腐のようなものだと思うのです。単純な材料、簡単な調理、しかも結構うまい——これですよ。そりゃ豊富な材料を駆使して、十分手をかけ、じっくり煮込むおでんの味もすてがたいけれど、時間のないとき、腕に自信のないときは何たって湯豆腐に限ります。てなわけで、湯豆腐の作り方・・・じゃなくて、卒論の書き方について本稿が何かの参考になれば幸いです。

§ 1. まず、いい材料を選ぼう

湯豆腐のウマさはほとんど豆腐の良し悪しにかかっています。すこしぐらくずれてもやはりイイ豆腐はウマいのです。豆腐がくさっていれば、どんな努力もムダです。「豆腐」を「テーマ」とおきかえれば卒論も同じことです。もう題目を出してしまいたいま、皆さんの豆腐はある程度絞られてはいますが、まだまだ選択の余地はあるはずです。十分に興味が持てて必ず一定の味＝成果が期待できるテーマが選べれば卒論の半分はできたようなものです。結論への見通しを持たずに、やってるうちに何か出てくるだろう・・・というやり方はしばしば悲惨な結果を招きます。「結論」は最後に出てくるのではなく、はじめにあるべきです。なければ、作ればいいのです。

§ 2. 余計なものを混ぜるのはやめよう

湯豆腐の良さはその単純明快さにあります。主役がハッキリしています。寄せ鍋のようにあれこれ入れると結局豆腐の味がそこなわれます。よく勉強した人に限って、「卒論は学生時代の総決算！」と意気込んで勉強したことを全部書こうとします。気持ちはわかりますが、結局何が言いたいのかわからない論文になりがちです。もったいないようでもバツサリ捨てる、これが明快な論文の決め手です。今は広い題目がついている人も、実際にはもっと絞ること。広く浅くよりは狭く深くのほうが論文らしくなります。よく長さを気にする人がいますが、まとまったことを主張しようと思えば 30 枚ぐらいにはすぐなります。ダラダラと長く引きのばすよりはスッキリと短くまとめることを考えるべきです。

§ 3. 80%の形式、20%の中身

豆腐はその成分のほとんどは水です。しかしその乏しい中身でしっかり四角ばっているそのけなげさ、卒論もこうありたいものです。はっきりいつてたかだか二年やそこらの勉強で、専門家もアツと驚く大発見などできるわけではないのです。昔ならいざ知らず、今の卒論にそれほどの内容的期待はかけられていません。それなのにいかめしく「論文」と呼ぶのは、まさに「論文」としての形式を備えているかどうか問題だからです。小説でも感想文でもエッセイでもない、ほかならぬ「論文」が書けているかどうか問題なのです。論文には論文の作法・スタイルがありますが、日本ではいまだに個々の書き手にまかされている面が多く、学校で教えてはくれません。したがって本屋さんにある『論文の書き方』みたいな本を一度は読んでみる必要があります。(論文の形式を整えるためには、澤田昭夫『論文の書き方』講談社学術文庫あたりが手頃かと思います) 今からでも遅くはありません。形式のキチンとととのった論文は、内容の貧困さを十分カバーしてくれます。本稿でもなるべく具体的に形式上の問題をとりあげるつもりです。

[第 2 回]

§ 4. 「わかりやすさ」のために

今回はちょっと湯豆腐にこだわりすぎました。ふと気がつけばもうそんなヒマはないのです。そこで今回は、より実践的・具体的に考察をすすめましょう。

4. 0 「わかりやすさ」ということ : 論文は自分の考えを他人に理解してもらうためのものです。どんなに優れた考えも、わかってもらえなければ無意味です。逆に「わかりやすく」書かれた論文は、それだけで読む人の共感を得ることができます。「わかりやすさ」はもちろん自分にとってのものではなく、他人の目を意識した親切さ・思いやりでなければなりません。「この表現で誤解する人はいないだろうか」「この説明でだれでもわかるだろうか」「この構成で混乱することはないだろうか」と、たえず他者の（それも無知でいじわるな読み手の）目で、自分の文を見なおす必要があります。特に言語学のような幅の広い分野では、ちょっと自分の専門から外れるとなかなかフォローしにくいものです。「こんな基本的なことは当然知っているだろう」とか「これについては参考文献を見よ」といって説明を省略するのではなく、何も知らない人でもわかるぐらいの親切さが必要です。「やさしく、わかりやすく人に説明できる」ことが結局その人の理解の深さと広さを示すということができます。

4. 1 「こまぎれ」にして「見出し」をつける : わかりやすく書くためにはいろいろな工夫が必要です。一つ一つの文が長すぎたり、意味のとり違えの恐れがあったりするのはもちろんいけません。しかしたいていの場合、論文をわかりにくくしているのは個々の文ではなく、「今この部分（章、節、段落）で作者は何を言いたいのか」が明らかでないことが原因となっていることが多いのです。それを避けるには、あらかじめ論点にそって章割りをし、必要に応じて中をさらにこまぎれにすることです。そのこまぎれ一つ一つに適切な題をつければ、その各部での主眼が明確になります。もちろん「こまぎれ」は論理的・構造的な分類でなければなりません。実はこの構造的な分類は全体を書いてからするのではなく、書く前にまず第一にしなければならぬ設計図のようなものです。設計図もない建物、海図のない船出、地図のない旅はいうまでもなく、倒壊・難破・迷子を意味します。

4. 2 論点の予告・確認 : こまぎれにして見出しをつけるだけでなく、書き手はたえず「自分が今、何を書いているか」を読み手に対して予告・確認する必要があります。一例を挙げれば次のような形で。

3. 5 xxxの△△△について [見出し]

前節では○○○について考えた。その結果○○○はxxxであることがわかった。[前節の要約] そこで次に本節ではxxxの△△△について考察をすすめたい。そうすれば□□□に対する手がかりが得られると思われる。[本節の目的・予告]

.....以上本節ではxxxの△△△をとりあげ、その結果□□□が○○○であることがわかった。[節の最後にもう一度ダメ押し]

このように少しくどいぐらいいくり返すことが、結局全体のわかりやすさにつながります。むろんこれはいささか極端な例ですから、実際には臨機応変に。

4. 3 図・表の活用 : 文だけでは理解しにくいことも、図や表の形にすれば一目瞭然となることがしばしばあります。たとえば言語の音素目録のようなものはただ並べるよりは、調音点・調音法別の表にまとめた方がすっきりすることはご存知のとおりです。表にするほどのものではなくても、たとえば

Aには○○○、×××、△△△の三つがある。

のように列挙する場合、

Aには①○○○、②×××、③△△△の三つがある。

とした方がずっとわかりやすく、便利です。

4. 4 「わかりやすい文」のための参考文献 : わかりやすさこそ論文の第一条件です。そのための工夫はまだまだあります。たとえば本節のタイトルで、「わかりやすい文」に「 」をつけたのも実は誤読をふせぐために一つの工夫です。

自分本位でない、わかりやすい文を書くことは基本的な国語能力の一つですが、学校では十分に教えてくれません。学校で教える「作文」はむしろ逆に、主観的で情緒的、文芸的にして感動的なものばかりです。それ以前にもっと、あたりまえの文の書き方を教えるべきではないでしょうか。

「ふつうの文」の書き方を教わっていない以上、次のような参考書を読まなければなりません。

- ① 木下是雄 『理科系の作文技術』中公新書
- ② 本多勝一 『日本語の作文技術』朝日新聞社（文庫版）

①はロゲルギスト、②はジャーナリストです。自然科学・社会科学畑からこのような本が出ていることを「文系」の人間は謙虚に反省すべきです。

§ 5. 引用の美学

5. 1 なぜ「引用」か : テーマが決まり内容への見通しがある程度ついたら、同じような問題についてすでに発表された文献を探し、目を通す必要があります。実は、これはテーマを決める以前から行なうべき作業なのですが、「泥縄式」では、あとからでもいいのです。「どうせこんな問題、だれもやってないだろう」と決めつけてはいけません。世の中にはもの好きなヒマ人が結構いて、どんな細かいことでも一度はだれかが考えているものです。特に人文科学では古いものもそれなりの価値をもっていますので広い射程の文献探しが必要です。図書館で古ぼけた雑誌の中に自分と同じテーマを見つけて、しばし学問の奥深さに打たれるのも一つの良い勉強です。

適切な引用は自分の論文に客観性と説得力を与えます。扱っている問題が、自分本位のひとりよがりではなく、すぐれた先人たちの土台をふまえたものであることを自覚し、アピールすることが論文ではきわめて重要です。このことは同時に自己のオリジナリティーの主張につながります。「自分の研究は従来のものでここが違うんだ」、「従来ここまでわかっていたが、自分はそれをここまで進めたんだ」——これこそが自己の論文の存在理由というものです。何が新しいかを知らせるためには、古いものについて十分わからせる必要があるのです。

5. 2 なぜ「美学」か : 自分の「発見」だと思っていたことが、文献を調べるうちに何十年も前にすでに発表されていた——ということがよくあります。でも必ずしもがっかりする必要はありません。人文科学では発見された事実そのものが同じでも、そこに至るアプローチが異なれば、それなりの意味はあるのです。要は他人の成果をいかにうまく、スキなく、美しく利用するかにかかっているのです。極端な場合、全く自分の手を汚さず、人の論文をつなぎあわせて(も

ちろん典拠を明記して合法的に) 新しい論文ができてしまうこともあります。そのような「つぎはぎ」でも、結果として独自の新しい視点を主張することがあります。そういう、見方によってはズルがしこい、しかしスキのない論文は、ある程度経験をつまなければなりません。ちなみに池上二良「アイヌ語の輪郭」(『アイヌ民族誌』1969) は短いものですが、全編に及ぶ見事な引用はまさに「美学」です。

5.3 「たたき台」としての引用 : 初心者はいよいよ引用の森に迷って、自己を見失うことがあります。引用はあくまでも自己の論点の正当化の手段であることを忘れてはなりません。そのためにはあまり引用を多用するのとも考えものです。また多用するためにはそれだけたくさん読んでいなければなりませんから、「泥縄式」にはふさわしくありません。実際問題として、文献をイモづる式にあさるのも適当なところで見切りをつけなければなりません。「参考」にするのは結構ですが、「引用」までするのは少数のものにしばります。具体的にある文献をとりあげ紹介・批判する場合は、はじめもちあげ、然るのちけなすのが定石です。ほめるのは、その論文がとるに足りないものではなく、引用して検討するに値するものであることを示すと同時に、自己の謙虚なそぶりを見せるためです。次に「しかし」と続けて、その欠点を容赦なくぐりぐりとえぐります。そのことが結局自己の正当化につながるからです。「この論文は〇〇についてはすぐれた見解を示しているが、××については全く不備である。そこで私は××についても考察を加えこの問題を一歩前進させることができた・・・」という弁証法的止揚にも似た明快な主張が論文には必要です。

5.4 引用の作法 : 引用は必ずしも「直接語法」で行なう必要はありません。だらだらと長すぎる直接引用はしばしば読む人をいらだたせ、しまいには怒らせませす。要はどの部分がだれの意見かがはっきりわかればいいのです。そのうえで自分の論文の流れの中で、明確に他者の説を位置づけていくことが大切です。自説と他説の区別のはっきりしない文は論文とは言えません。また他説が自説にどう関係しているのか、いいかえれば何のための引用かが明らかでなければなりません。

引用は①正確で、②洩れなく、③一貫していなければなりません。①について言えば内容はもとより、仮名づかい、つづりも原文を尊重すべきです。仮に原文に誤り(らしきもの)があっても引用はそのまま記し、その箇所に「ママ」(欧文なら sic) と付記するのがならわしです。②は特に文献の情報を書く際に注意すべきです。最低限だれの、何という本(論文)の何ページに書いてあるのか、その本はいつ、どこから出されているかを知らせる必要があります(実際には本文の中では(田中 1981, pp.21-23)のように書いておき、論文の最後の文献目録でくわしく述べればよい)。③は論文全体についても必要なことですが、特に文献名を記す際のカッコなどは一貫した使い方をすべきです。ふつう「」で論文名、『』で単行本・雑誌を示します。欧文なら“ ”で論文名、書名・雑誌名にはアンダーラインを引きます。

[第 3 回]

毎朝、残り少なくなった日めくりを**ジャリッ**と破る。この快感・・・過ぎ去った昨日に用はないぜ、俺は今日を、そして明日を生きるのだ、ふっふっふ・・・なに？ 卒論まであと29日？ ジタバタするこたアないさ、あしたやればいいじゃないか・・・そ、それにしても、この明るさは何だ。この緊迫感のなさは何故なんだ。部屋には相も変わらずワイワイ NHK とばかりに嬌声が満ちている。彼女らには「悩み」とか「心配」とかはないのであろうか？ こっちの方が心配になる。お嬢さんたち、あとで泣いても知りませすぜ。「泥縄」は溺れる者がすぎるに耐えるほど頑丈にはできてないんですよ。

そんなわけでこのシリーズ、どれだけあてにされているのやらないのやら、いきがかり上ズルズルときてしまいましたが、実は確固としたプランなどあるわけもなく、まさに「泥縄式考察」なのです。今回も思いつくまま書いてみます・・・。

§ 6. 注についての注

前回は引用について述べましたが、引用と密接な関係にあるのが「注」です。他者の言を引用する場合に、「○○によれば・・・」とか「○○は次のように述べている」とするのが、最も自他の区別がわかりやすいのですが、実際には本文では「自分のことば」の形で述べて、注で典拠を示すということがよく行なわれます。そのほうが、論全体の流れをスムーズにするからです。引用以外の場合でも、直接本文の論旨とは結びつかないこと、しかし全体の理解のためにはぜひ述べておきたい補助的情報などは注の形で述べます。もし全部本文の中で書いてしまうと、どれが論の主体で、どれが補助なのかがわかりにくくなります。

そんなわけで上手な注の使い方が「わかりやすさ」につながります。また注のある文というのはそれだけでも、いかにも論文みたいではありませんか。

しかしあえて注意したいのは、「注は多すぎるな」ということです。注の多い論文は読み手にとっては必ずしも読みやすくはないのです。さきほどの言と矛盾するようですが、多すぎる注はスムーズな読みを妨げます。一節読むのに何度もうしろをひっくり返してみるのはたまりません。脚注ならまだましですが、原稿用紙では困難です。^{注)} まして探してあてた注がただ「田中 1981, pp20-21」などとあったらよけいイライラします。さしあたりどうでもいいようなことをいちいち言われると、口うるさい姑に対するような怒りを感じます。だから注は必要最小限にとどめるべきです。引用の典拠だけなら本文の中に () で示せば十分です。出典だけでなく、一般に () 書きで済むものは、いちいち注にしないうほうがいいでしょう。

そうすれば注にまわすのは、本論とは多少離れるが、意味のある重要な情報ということになります。その際、注の頭の頭に「ちなみに」とか「なお」とかを付けると、あまり論旨と関係ないことも書きやすくなります。

例：言語中にはすでに話し手の失われた「死語」もある。コーンウォール語の最後の話し手は 18**年に鉱山の爆発で死んだ。

この文は本文の中に細かい情報が入りすぎているので、注を使って次のようにすればすっきりします。

言語中にはたとえばコーンウォール語 ^{*)} のようにすでに話し手の失われた「死語」もある。

*) ちなみにその最後の話し手は・・・

注) 「注についての注」についての注

いったいだれが卒論は「原稿用紙」に書くべしなどという悪習をはじめたのでしょうか。一枚に 400 字しか書けない情報量の乏しさ、その分デカイ字で書かなければならないバカバカしさ、そして何よりも脚注がかけないのがガンです。もちろん字の大きさがそろって、字数計算ができるというメリットはありますが、それだけならもっと小さいマスがたくさん並んでいけばいいのです。

本来、書き足し、訂正のためにある空間も清書原稿では無意味です。そもそもが印刷の前段階のための用紙なのでから、最終段階としての卒論に原稿用紙を使わなければならない根拠はありません。脚注欄のある 800 字詰ぐらいの原稿用紙はないものではないでしょうか。今度ワープロで作ってみようかと思っています。でもそれより、卒論そのものをワープロで打つ人はいませんか。

きれいな原稿は内容の貧困をカバーします。

[最 終 回]

いよいよ 12 月ですなー。はっはっはっ・・・

本来ならこんなものを読んで参考にしたりする時期ではないのですが、今年はまだ間に合いそうなのが不思議です。聞けば、うし年の女の子が多いそうです。どうりでねー。しかしいくら何でももうあとがない。というわけで、最終回は

緊迫感をこめて。

§ 7. とにかく体裁を繕うしかないっ！

7.1 目次 : あまり長くない論文でも目次はあったほうが良い。何章が何ページから始まるのかを知るためではなく、全体の構成とその流れを知るためです。したがってできるだけくわしい、しかも構造的な目次こそがわかりやすい論文の第一ページです。むろんそのためには本文が適切な見出しのもとに、構造的に細分されていなければなりません。(本稿4.1参照)

7.2 序 : 「序」、「まえがき」、「はじめに」・・・タイトルはともかく、本論の前にこの一章を置きます。ここで「この論文は何を扱うか」、「そのきっかけ・動機」、「その問題をめぐる現状」、「これまでの研究」、「以下の各章の流れ」、「結論の予告」などを行ないます。いずれも本論への導入として必須の事柄です。むろん、なかには本論の一部としてあらためて詳しくとりあげたいこと(たとえば「問題の現状」「研究史」など)もあるでしょう。その場合でも「序」で概観にふれておくべきです。特に「これまでの研究では不十分」なことを強調すべきです(十分なら、もう何も書く意味がなくなります)。「結論の予告」でこの論文の新しさ、目玉をアピールするわけですが、これはあまりくわしすぎないこと。犯人のわかってしまった推理小説はおもしろくありません。サスペンスを失わない程度にとどめるのがミソですが、それでもあまりこだわる必要ありません。アツと驚くどんでん返し・・・は論文にはふさわしくありませんから。

7.3 本論 : 本論の書き方を一般的に決めることはできません。個々の論文に応じた章立てや節割りが要求されます。各章では、その章で扱うことからの予告と、扱ったことからの確認をします。(本稿4.2参照)

7.4 まとめ : 「まとめ」、「結論」、「おわりに」などとして論文全体をふり返ります。各章の要点をもう一度くり返し、特に結論にあたることや新しい発見はしつこいぐらいに強調します。そのあとで「しかし・・・」と続けて、自己の不十分な点、残された問題点に言及することも忘れてはいけません。それらについては「今後の課題」としておきます(多分もう二度と考えることがなくても「今後の課題」でいいのです)。

7.5 注・参考文献・付録 : このあと最後に注や参考文献が続くのがふつうです。参考文献は本文や注の中で直接・間接に引用したものに限定します。やたらたくさん並べるのはあまり感心しません。並べ方は量や場合にもよりますが、和文、欧文にわけてそれぞれ著者名のアルファベット順にするのがふつうです。同一著者のものがいくつかあれば、それらを年代順に配列します。訳本の場合は原著のタイトル、出版年も忘れないこと。参考文献についてはできるだけ詳しく書くこと。出版地、出版社なども省略せぬよう。また調査資料、語彙集、原テキストなどを本論とは別に付録としてつけることもあります。あくまでも本論の補助ですから、雑誌の正月号みたいな豪華付録にはしないこと。

§ 8 ジ、じ、時間がないっ！

とにかくもう書けるところから書くこと。壁にブチあたって筆が止まったら、そこは後まわしにしないと時間のムダになります。そのためにも文はコマ切れになっていたほうがいいのです。

よくあることですが、清書の時間を甘く見てはいけません。完全な下書きを写すだけならともかく、たいていは表現の推敲や漢字・つづりの確認、参考文献のデータ不足などさまざまな雑務がともないます。誤字・脱字はもちろん、いかにもアセッタなという原稿は、それだけで論文の価値を下げます。ととのった字で表紙やとじ方にも気配りのあとが見られる論文は気持ちがいいものです。

前後しますが、清書に入るまえに人に見てもらふことが必要です。必ずしも言語学がわかる人でなくてもいい。とにかく第三者の目でわかりやすさをチェックしてもらふべきです。これは清書前でなければなりません。清書をいきなり見せられても、もう直す時間がなければどうしようもないし、きれいに書かれてあるほど直すには勇気がいるのです。もちろん下書き段階と清書とで目を通してもらうのが理想的です。

いずれにせよ、人に見てもらっても最終的には自分の責任で書かねばなりません。

もう時間がないのだ。クリスマスのベルが鳴る・・・

永らくご愛読いただき有難うございました。不十分な論考ではありますが、一つでも参考になれば幸いです。ご質問いつでも歓迎します。

[番外編] レポート作成のためのABC(+D)

A. テーマと標題

レポートにどんなテーマを選ぶか、そしてどんな標題をつけるかは、よいレポートを書くための第一歩である。テーマについてはあらかじめ、ある程度の範囲が与えられるのがふつうだが、その範囲をよく見きわめたうえで、自分が最大限興味を持てる問題を選ぶ。「広く浅く」よりは「狭く深い」題材に絞ろう。これで行こうと決めたら、それをうまく表わすタイトルにこだわろう。インパクトがあって、具体的な中身がわかるような標題を工夫したい。メインとサブを合わせるのもよい。

B. 自他の区別

レポートの良し悪しをきめる、もう一つのポイントは、論述が客観的で、報告者(執筆者)の立場が明確かどうかである。テーマに関していろいろ本を読んで調べたり引用したりするのは当然必要な作業だが、それを文章にする場合に、どこが人の言ったこと(本に出ていたこと)で、どこが自分の言葉なのかを明確に区別されていなければならない。ただ最後に参考文献を並べておけばいいというものではない。その本の何ページを、本文のどこの記述でどう使ったかまで、きちんと示すべきである。逆に自分だけのデータ(自身の見聞や経験、調査)を最大限活用することも有効。要するに、他者の説を踏まえたとうえで、自説をいかにうまく展開できるかが、レポートの命。

C. 段落分けと見出し

上で、中身を表わすような標題が重要と述べたが、これはレポート全体ばかりでなく、部分にもあてはまる。論述の流れに応じて、段落に分け、それぞれにふさわしい見出しを付けることで、論の流れは格段に明快となる。レポートの冒頭では、このレポートが何をどんな流れで扱うのか、その結果何が言えるのか、という全体の流れを予告しておく。最後では要点をまとめて繰り返し、残された問題点などにふれる。こうした予告とまとめは、レポートの最初と最後だけでなく、長いレポートでは各章の頭と末尾にあると親切。

D. 表現の気配り

文章がわかりにくくないかチェック。だらだら続く長い文はなるべく短く切って、あいだを適切な接続詞で結ぶほうがいい。ただ文章として書き連ねるより、場合によっては、表や番号付きの箇条書きなどを工夫すると読みやすさが増す。()や「 」もうまく使うと効果的。漢字の使い方や点(、)の打ち方一つにも気配りを。言うまでもなく、誤字・脱字・変換ミスはレポートの価値を大きく損なう(「なんだ、こいつ一度も読み返してないのか」ってことになる)。要するに、「読む人の立場になって書く」、これが大事。